
STUDY ONE

～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

「STUDY ONE～中学生の学習支援～」

高校受験を控えた中学3年生を中心に、進路実現をサポートするための学習支援と子どもたちが安心して学習できるような空間、居場所作りを展開し、「子どもの貧困」という社会問題に関する理解を深めることを目的とする。

2. 代表者および構成員

・代表者

廣田葉月 教育学専攻 2回生

・構成員

上松夏林 教育学専攻 4回生

森垣奈々 教育学専攻 4回生

横田美莉 教育学専攻 4回生

阪本栞菜 発達障害領域専攻 4回生

村上結菜 発達障害領域専攻 4回生

渡邊鈴佳 発達障害領域専攻 4回生

下里愛子 理科領域専攻 4回生

松井遼太郎 美術領域専攻 4回生

金原早希 社会領域専攻 3回生

下田馨介 社会領域専攻 3回生

中川優佑奈 社会領域専攻 3回生

宮島孟史 社会領域専攻 3回生

安永和貴 社会領域専攻 3回生

山下穰大 社会領域専攻 3回生

福島嵯都 理科領域専攻 3回生

鍋島圭 教育学専攻 2回生

松田健 教育学専攻 2回生

天野小春 国語領域専攻 2回生

岡田蔭しいな 国語領域専攻 2回生

阪本萌菜美 国語領域専攻 2回生

酒井彩花 社会領域専攻 2回生

藪下瞬 数学領域専攻 2回生

松本和樹 技術領域専攻 2回生

根岸亮太 教育学専攻 1回生

岩井愛子 社会領域専攻 1回生

田村伊歩希 社会領域専攻 1回生

矢野詩織 社会領域専攻 1回生

堀尾泰伽 英語領域専攻 1回生

村松良磨 英語領域専攻 1回生

石垣元陽 数学領域専攻 1回生

森實康太郎 理科領域専攻 1回生

3. 助言教員

神代健彦先生（教育学科）

中村瑛仁先生（教育学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

(1) 活動概要

時間：毎週金曜日 18:00～20:00

場所：伏見いきいき市民活動センター

対象：中学生

(2) 活動目的、内容

放課後学習支援教室は、中学生の学習支援、居場所支援を目的としている。支援を必要とする中学生に支援が行き届くように藤森中学校との連携を行うとともに、中学生の実態に合わせた多面的・多角的な支援を行うための情報共有を行ってきた。

現在の登録者は中学3年生9名、2年生1名の10名である。中学生への連絡は公式LINEを通して行っており、毎週活動日の前には活動の告知を行った。また、中学生が大学生に質問したり、活動になかなか来ることができていない中学生に連絡したりするなど、中学生との繋がりを保つためにも活用した。

今年度は、4月中旬から活動を開始した。毎回の活動には5名程度の中学生が参加しており、学校の宿題に取り組んだり、教科書や団体で所有する参考書などを用いて中学校の授業の復習を行ったりして活動時間を過ごしている。中学生が分からない部分については大学生がホワイトボードやルーゼリーフ

を活用して視覚的に理解しやすくするなど工夫して教えたり、勉強時間と休憩時間の配分や学習方法について助言をしたりするなど、中学生の学習支援につながるようなサポートを行った。

学習支援のみならず、中学生の居場所支援も行ってきた。STUDY ONE で、家族や友人、教員などとは別のつながり、大学生という中学生にとって年齢が近い学生との結びつきや、学校でも家庭でもない居場所があるということが中学生にとっての安心感につながるように、活動の雰囲気作りを行ってきた。また、七夕やハロウィン、クリスマスにはイベントを行うなど、相対的貧困に伴う経験格差の是正や中学生にとって来たいと思う、安心して楽しむことができる居場所作りのための取り組みを行った。

中学生の帰宅後には、学生間で中学生についての情報共有を行い、構成員全員で中学生を見守り、関わることをできるようにした。

昨年度同様、新型コロナウイルス感染対策のガイドラインの作成も行い、安全に活動が行えるよう工夫した。

2. 研究活動

(1) 研究活動

「子どもの貧困について」、「学習支援・居場所支援について」という二つのテーマで研究活動を行った。グループ分けをし、それぞれのグループが研究テーマについて様々な文献を用いて資料を作り、発表を行った。

(2) 他団体への視察

龍谷大学の学生による「京の拠り所」、「カーヤ子ども食堂」への視察を行った。

令和5年11月3日に、「カーヤ子ども食堂」に伺った。「カーヤ子ども食堂」は京都スパイスカレー KAYYA で開催されている。毎週第4水曜日はカレーの日、毎週金曜日はおやつ時間が設定されており、「いまを生きる勉強会」の開催、ブックシェアリングなどを行っている。「子どもたちに温かい手作りの食事をおなかいっぱい食べてほしい」といったことを理念としている、誰でも利用できる場を開いている。当日は、金曜日のおやつ時間に来た小学生

の様子を見たり、代表の木村絢香さんの話を伺ったりすることができた。

令和5年11月9日に、「京の拠り所」に伺った。

「京の拠り所」は龍谷大学と公益財団法人 京都市ユースサービス協会・京都市の連携事業として始まった団体で、龍谷大学文学部哲学科教育学専攻の学生によって運営されている。龍谷大学所有の江戸時代に作られた深草町家キャンパスで行われており、家庭での学習環境が整いにくい中高生を対象としている。「学校・家庭とは別の第三の居場所を提供したい」などの理念に基づいて活動を行っている。当日は実際の活動の様子を見たり、龍谷大学の大学生と活動について話し合ったり、質問をしたりする機会を得ることができた。

(3) 勉強会

子どもの貧困についての更なる理解、放課後学習支援教室の質の向上などを目的とした勉強会を行ってきた。また、学年や専攻の違う大学生同士の結びつきのための交流も兼ねている。

以下、実施日時・内容（第15回以降は予定）。

- 第1回（6月16日）自己紹介と本年度の方針の確認
- 第2回（7月21日）こども家庭庁について
- 第3回（8月4日）ひとり親家庭支援（京都府）
- 第4回（9月1日）貧困の連鎖 データ読み取り
- 第5回（9月8日）STUDY ONE をより良い団体にするためにできることは何か
- 第6回（9月22日）京都府の高校受験制度について
- 第7回（10月13日）中間振り返り・新規生を迎えるにあたって
- 第8回（10月27日）視察先について・視察に関する諸注意
- 第9回（11月17日）研究・探究活動について
- 第10回（11月24日）視察一次報告①カーヤ子ども食堂
- 第11回（12月1日）視察一次報告②京の拠り所
- 第12回（12月15日）中学生の募集方法について
- 第13回（12月22日）視察成果発表会に向けた班活動
- 第14回（1月5日）視察成果発表会

- 第15回(1月19日)成果発表会の振り返り(1)
- 第16回(2月2日)成果発表会の振り返り(2)
- 第17回(2月16日)成果発表会で出た案の省察
- 第18回(3月8日)一年間の活動の振り返り
- 第19回(3月29日)まとめ・引継ぎ式

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

今年度は、新型コロナウイルスの影響も昨年度に比べると小さくなり、中学生と積極的に関わることができた。以前は中学生の席を固定にしていたが、固定せず自由に席や部屋を選べるようにしたことで中学生のニーズに合わせた対応がより柔軟にできるようになった。具体的な例を挙げると、勉強したいときは静かな部屋で活動する、おしゃべりやゲームがしたいときは勉強している子がいない部屋に移動するといった対応ができるようになった。それぞれの部屋に固定されていた関係性がゆるみ、中学生同士の関係が深まる、担当の大学生以外の大学生とも関わる機会が増えるなどといった効果が見られた。

また、昨年度に引き続き担当制を用いたが、中学生のニーズに合わせて違う大学生がサポートに入ったり、担当する大学生を複数名にして様々な大学生と関わりを持つことができるように工夫した結果、中学生が自ら積極的に大学生と関わろうとする姿が見られた。さらに、継続して活動に参加する中学生も増え、中学生にとって来たい場所になっているのではないかと感じた。

今年度は受験を控えた中学3年生が多かった。受験に向けた意識を持っている中学生も、逆にあまり意識を向けることができていない中学生もいたため、受験への準備のための働きかけをどのように行っていくかについて考える必要があった。志望校に合格した生徒も出て来始めたが、まだ受験を控えている中学生もいるため、引き続き勉強面だけでなく、気持ちの面でも支援できるようにしていきたい。

中学生が帰宅した後には、中学生の様子についての共有や大学生自身の教え方や接し方についての振り返りを行った。疑問に思ったことや困ったことについても共有し、全体の課題として考え、意見交流を行うこともできた。

中学生の様子についての振り返りをノートに書くということを昨年度に引き続き行ってきた。特に今年度では、昨年度のノートの書き方が統一されておらず、見にくいという反省をいかし、ノートの書き方を統一し、スムーズな情報共有につなげることができた。

2. 研究活動

(1) 研究活動

「子どもの貧困について」、「学習支援・居場所支援について」というテーマで研究活動を行い、発表を行った。

「子どもの貧困について」では、絶対的貧困と相対的貧困についての確認から、日本で問題となっている相対的貧困について考えた。貧困線に満たない家庭があるということやその家庭で育つ子どもが感じている困りや問題点について研究を行うとともに、子どもの貧困の影響について、教育格差と虐待を挙げ、子どもたちに関わる立場にあるからこそできることについて考えた。

「学習支援・居場所支援について」では、「子どもたちのつまずきと支援」、「ワーキングメモリと学習支援」、「すき間の子どもの支援」、「学習・居場所支援事業」という4つのテーマに注目し、研究を行った。困りを抱える子どもへの対応や子どもたちの学習にとって必要なこと、グレーゾーンにある子どもの心の中の貧困などについて考えた。一人一人異なる個性や背景を持つ子どもと接し、成長に関わっていくということについて考えることができた。

(2) 他団体への視察

「カーヤ子ども食堂」では、子どもにとって安心できる場所作り、困りを抱えている子を見逃さないということなどについて学ぶことができた。食堂は誰でも利用できる場であるからこそ、食堂に通っていることを理由としたいじめの発生につながらないようにしているのではないかと考えた。また、子どもだけでなく、その保護者ともコミュニケーションを積極的にとることで信頼や安心感につながるような工夫が見られた。ブックシェアリングは、生徒に本を読む機会を提供することにつながるかもしれ

ないので、STUDY ONEにも導入を検討したい。また、保護者の信頼の獲得ということについて考える機会も得ることができた。

「京の拠り所」では、居場所支援や経験格差を埋める工夫などについて学ぶことができた。子どもに学生がつくことについても、STUDY ONEでは担当制で行っているが、京の拠り所では特別なニーズがない限り固定にはしていないといった違いが見られ、中学生が様々な大学生と関わる機会を作るということを目的とするならば、担当制について見直しても良いのかもしれないと考えた。また、京の拠り所は学習支援よりも居場所支援に比重を置いており、STUDY ONEの活動の目的について考える機会を得ることができた。

(3) 勉強会

現在行われている政策や活動について学ぶ、STUDY ONEをよりよい団体、活動にするためにどのようなことが必要か話し合うなどといったことを2週間ごとに勉強会で行ってきた。

今年度は受験を控えた中学3年生を迎えての活動であったが、京都府以外の他府県出身の大学生が多く、受験の制度についての不安があったため、京都府の受験方法について確認する機会を設けた。

このように活動に関して不安があることについて学ぶ機会を設けたり、問題点や課題点などについて話し合ったりすることで、活動の質を上げ、より良い団体作りにつなげていくことができた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度は中学生に対して大学生が多く、余ってしまうときがあるということが課題となった。そこで、余ってしまう大学生が集まり、中学生への教え方を考えたり、中学生が学ぶ範囲の学習の確認をしたりする勉強会を開催することにした。数回開催することができたが、まだ開催を恒例化することができていないため、更なる工夫について考える必要がある。

今年度は中学3年生が多く、中学1、2年生が極端に少ない状態になってしまっていることも課題として挙げられる。中学生の同学年の結びつきが生ま

れていることは良い変化としてみるができるが、年齢が上の学年あるいは下の学年との結びつきをあまり作ることができなかったため、藤森中学校との連携の強化とともに、中学生にとってより成長できる環境を作ることできるようにしていきたい。

中学生の学習面での成長に注目すると、今年度ほどの生徒も自ら積極的に学ぼうとする姿が見られた。大学生とのつながりが深まったことの影響もあり、分からない部分や学びたい、興味がある事柄についての相談が増え、中学生にとって自らを高める場になっているのではないかと考えた。勉強に取り掛かることができなかつたり、落ち着きが見られなかつたりした子も、自ら学んだり、集中して取り組む姿に成長を感じられる場面が増えてきた。よりよい支援のために、中学生のニーズに合わせた環境作りに励みたい。

また、貧困や支援に関する研究活動や他団体への視察、勉強会など、大学生の知見を深め、活動をより発展させていくための活動を数多く行うことができた。研究や視察を通して得た学びや気づきについて発表し、共有することで、構成員全員がよりよい団体作り、活動について考えることができた。様々なことを学び、視野を広げることで、団体の良いところはもちろん、改善点などに気づき、中学生にとって安心できる居場所作りを考える機会を得た。担当制を緩め、柔軟な対応ができるようにする、中学生の学習支援のための大学生の勉強会を行うなど、活動を改良、更新していくための取り組みを行うことができた。来年度は今年度新しく始めた取り組みの是非を見極め、更新していき、よりよい中学生のための支援の方法について考えていきたい。